

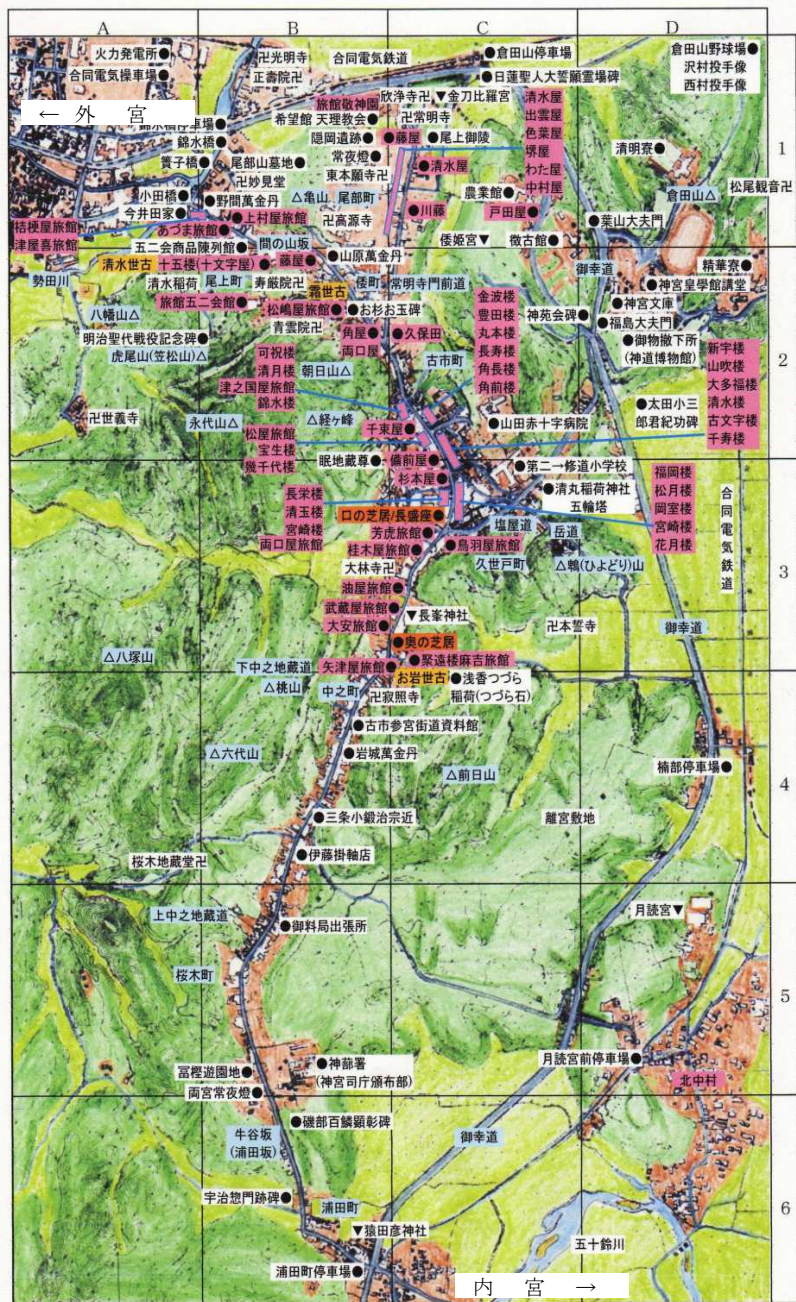
遊里古市

目次

| | |
|---------------|----|
| はじめに | 1 |
| 古市遊里の誕生 | 2 |
| 最盛期と伊勢音頭 | 5 |
| 江戸末期・明治維新 | 9 |
| 新道遊郭の台頭、交通の発達 | 10 |
| 世代交代 | 12 |
| 「遊里古市」の終焉、考察 | 17 |
| 二大妓楼の世代交代 | |
| 杉本屋（菊寿楼、萃表楼） | 21 |
| 備前屋（牛車楼） | 31 |
| 杉本屋と備前屋の軋轢と融和 | 35 |
| 謝辞、参考文献 | 39 |
| 年表 | 40 |



遊里古市



古市名所図会

はじめに

郷土史を研究する者にとって古市は魅力的な町であるけれど、その資料は意外と少なく、古市生まれの郷土史研究者である野村可通氏の著書を参考にすることは、宇治山田市史第7、地誌編第1章第6節「大字史その3 古市町」や第6、庶業編第7章「遊郭」の記述くらいしか見当たらない。しかも、それに関係された明治後期から大正期に活躍された方々の略歴はそれ以前の方々に比べて極端に少なく、彼らの実態を把握することも非常に難しい。それらの少ない資料をまとめて「遊里古市」の栄枯盛衰を明らかにしたい。なお、かなりの文章をこれらの資料から転載していることをお許し願いたい。

現代御師再考塾 太田小三郎研究室

秋田耕司

古市遊里の誕生

遊里とは、遊女屋の多く集まっている一定の区域を指し、遊廓、くるわと同意語である。遊女・売女・女郎を置いて客を遊ばせることを業とする店を妓楼・遊女屋・女郎屋という。茶屋・待合・料亭は客の求めに応じて芸者・遊女を呼んで楽しませるのが業であり、自家で遊ばせることはない。後に貸座敷とも呼ばれる。茶屋にいる遊女を茶汲女と称したこともある。料亭は料理も楽しませたのは勿論である。

客が太夫などの高級な遊女を呼んで遊興した店は揚屋あげやと呼ばれ、茶屋より格が高かった。また、置屋は芸者や遊女を抱えて、茶屋・待合・料亭に差し向ける業をいう。遊女が常駐しているのか、呼ぶのか、差し向けるのかに業の違いがある。しかし、本著では妓楼、茶屋、あるいは貸座敷などの区別は明確ではない。

また、本著での「古市」という表現は、小田の橋から浦田町まで、つまり、妙見町(新名尾上町)から常明

寺門前町(倭町)、下之町、中之町(古市町)、堂の辻、寺屋敷、西裏「浦」、寒風、榎谷、稻荷町、下中之地藏(中之町)、四ツ谷、上中之地藏町(桜木町)の範囲の総称として表記している(明治元年、仏語町名を改称)。

地形的に「古市」は、内宮と外宮の中間に位置して、その北は亀山(倭町)、東側には鴨ひよどり山、前日山、西から南側へ、虎尾山、朝日山、永代山、経ヶ峰、桃山、六代山に囲まれた小高い尾根道沿いにある。小田の橋からは尾部坂を登り、比較的平坦な尾根道を経由して、牛谷坂を下って宇治に至っている。内宮・外宮両宮の間にあることから、この辺りを「間の山」とも呼び、この道筋を「古市街道」と呼んでいる。

現在では、この古市尾根道の東側に平坦な御幸道路があり、西側には御木本道路があるにも関わらず、苦勞をいとわず急峻な尾根道を選択したかという、東側は五十鈴川の氾濫に、西側は勢田川流域の湿地で参宮の足をとられたのが理由であって、常に往来できる道を選択した結果であったであろう。

さて、この「古市街道」は何時頃からあったものだろうか？

神代の時代から考えてみる。宇治山田史によると、内宮(皇太こうた神宮)の創建は、「倭姫命世紀」によると、第11代垂仁天皇の御代26年だという。神話を信じ、単純計算すると紀元前2年か。また、弥生時代の頃である。外宮(豊受とようけ大神宮)はというと、平安初期の「止由気とよけ神宮儀式帳」によれば、天照大御神の神託によつて、雄略天皇22年西暦478年に丹波国の比沼真奈井原まないはらから、伊勢山田ケ原やまがはらへ遷座したことが起源であると伝えられている。小学生の頃の副読本「伊勢市のあゆみ」によると、この頃、つまり大和・古墳時代から、伊勢の町は神宮の門前町として成り立ってきたというので、両宮を接続する「古市街道」はこの頃には既に形を成していたと考えられる。

両宮の遷宮も第1回は持統天皇5年西暦690年前後と記録されているので、8世紀前後の奈良時代には両宮の格式が完成されていたように推測するけれど一

般の参宮というものがあつたのかどうか。

12世紀頃の平安時代後期になると、宮川扇状地の山田ヶ原に平清盛堤ができて水害を防止したように、平氏との関わり合いもできてくる。この頃には御師が成立し始め、13世紀前後の鎌倉時代には参宮が盛んになったようだ。15世紀前後の室町時代には、伊勢神宮への信仰心が強くなり、町として急速に発展する。この頃、宇治では大火があり、5〜600軒が焼失したとの記録もあることから、両宮門前町はかなりの規模になつていたと思われる、そのような背景の中、継続された遷宮の第40回は1462寛正3年に行われている。

しかし、その後、戦乱の時代、即ち、戦国時代になつたことで124年間、遷宮は中断することになり、町は荒廃したであろう。その後の安土桃山時代の1586天正13年、慶光院の努力により遷宮が復活して第41回が執り行われるようになり、それからは現在まで遷宮は絶え間なく行われることになる。さらに、織田信長が通行税を廃止することで参宮客が押し寄せるよう

になり、さらに、外宮から小田の橋に行く場合に元は岩淵町を経由したが、秀吉の命により上部越中守貞永が高神山と坊山の間を切り開いて岡本町を経由できるようにするなどあつて、益々、参宮は盛んとなった。江戸時代から「参宮」という言葉が使われるようになり、「一生に一度は参りたい」という願いが強くなつて、「伊勢講」という仕組みができて、さらに「参宮」は盛んになる。

全国からの「参宮」は、伊勢街道、初瀬街道、伊勢本街道、和歌山街道、参宮街道、熊野街道のいずれかを経由するけれど、宮川の渡しを通過するとそのほとんどは筋向すけむかひの橋で収斂して、外宮前から小田の橋、「古市街道」を経由して内宮に至る1本道となつて、神宮創建以来、江戸時代に入るまでの約千年近くに亘り、多くの往来があつたものと思われる。そして、その街道筋の古市(間の山「帯」)には、人家あるいは娼家が江戸時代初期にはすでに多く立ち並んでいたと推測できるが、宇治山田史P. 769によると、徳川時代初期、1

636寛永13年の頃には間の山にただ6軒家のみであつたが、との記述があるけれど、にわかには信じ難い。

「遊里」は、東京浅草寺そばの吉原のように寺の周辺で発祥することが常である。当然ながら、古市にも小田の橋から、妙見堂(平安時代末)、寿巖院(創建1615年)、常明寺(平安時代末)、1767明和4年新地を開き、常明寺遊郭が形成された)、大林寺(同1625年)、本誓寺(同1636年)、長峯山地蔵院、寂照寺(同1675年頃)などがあるので、それらの門前で、江戸時代初期頃より以前から、「遊里」は自然発生したものと考えられるが、その秩序は整つていなかったであろう。

後に、古市3大妓楼の二つに数えられる「備前屋」は、郷土史草第13号「古市の表支えた裏通り」P. 49によると、「(大正5年小三郎が死亡して遺族が大阪に引き上げた時から数えて、)ここに300年続いた伝統の日は消え……、とあることから逆算すると、備前屋は1615〜23元和年間に創業したのかも知れない。

従つて、江戸初期には古市遊里は既にかかなりの規模を誇つていて、参宮の往来で賑わうようになり、町並みもだんだん揃うようになってきたと考えられるが。

1632寛永9年、前年に山田奉行に任じられた花房志摩守が遊女の追放を命じたことがあつた。その10余年後、1652〜5承応年間には中之地藏町に人家63軒、古市町に96軒と急増して、町としての発展がこの頃より始まり、その後、茶屋も出来るようになった。

つまり、遊女を置いて客を遊ばせる遊女屋という形態は禁止され、客の求めに応じて遊女を呼んで楽しませる、あるいは、遊女を茶汲み女と称して楽しませる茶屋という形態は認められたことだろう。1661〜80寛文〜延宝年間には茶屋に茶汲女を二人置くことが許され、1688〜1703年元禄年間にはさらに、茶屋と称する大店も数軒でき、益々発展していく。

1704年宝永初頭には古市に薨を連れ、軒を競う豪華な町並みが形成されるようになる。1716〜35年享保年中には、宇佐美屋、備前屋、中村屋、千歳屋

などが第7代尾張藩主徳川宗直の施政により新しく形成された名古屋新地に出店できるほどに大楼が威勢を誇つた。しかし、1736元文元年、名古屋新地が停止されたために出店した大店は古市に帰つたが、一層、生業を拡張したという。この頃、江戸時代中期には参詣者数百万規模に及んだお蔭参りは例外としても、毎年およそ20万から40万程度の参宮者が伊勢に流入している。

最盛期と伊勢音頭

1741〜3寛保年間前後に、その後、「備前屋」とともに古市3大妓楼の一つに数えられる「杉本屋」が創業したのではないかと考えているが、その頃、顔見世に向くように各楼、各様に伊勢音頭が誕生した。元来、伊勢音頭は盆踊り歌が改作された河崎音頭から派生したものと言われているけれども、見せるより聞かせるものだったので、遊女や芸妓に踊らせるのは不向きであ

った。その改良型伊勢音頭を採用したのは古市妓楼の中で備前屋が一番古く、1748〜50寛延年間には伊勢音頭による顔見世を始めて大なる呼び物となるに至つて、他の大楼も採用し始めた。1781〜8天明年間に古市は全盛期に入り、江戸の吉原、京都の島原とともに3大遊郭の一つ、あるいは、大坂の新町、長崎の丸山を加えて日本5大遊郭の一つと称されるほどになった。1782天明2年当時の古市には人家342軒、妓楼70軒、大芝居2場があり、遊女は約1,000人に及んで繁栄を極め、川柳に「伊勢参り 大神宮にもちよつと寄り」と歌われるほど活気に溢れていた。中でも備前屋、杉本屋、油屋、柏屋の4軒が「古市4大遊郭」として特に栄えていた。100畳近い大広間で、三味線や胡弓を奏でつつ、2、30人の遊女による「伊勢音頭」の踊りが売り物であったが、見物料は、講中で10人位まで(20人までとしている道中記もある)は1両(現在の10万円くらい)という金額であった。

1794寛政6年、古市は大火(寛政の大火)で町の合は全員、右から出て左へ引込んだ。また、音頭の歌詞も各楼それぞれに持ち歌があり、杉本屋は「菊の寿」、備前屋の伊勢音頭



大半を焼失したけれど遊郭改築の好機となり、さらに大廈高樓を建て並べ、古市は不夜城の盛況を成すようになっていた。同時期、備前屋5代目が「せり上げ舞台」を作らせ、伊勢音頭を踊らせたことによりさらなる評判を得ている。

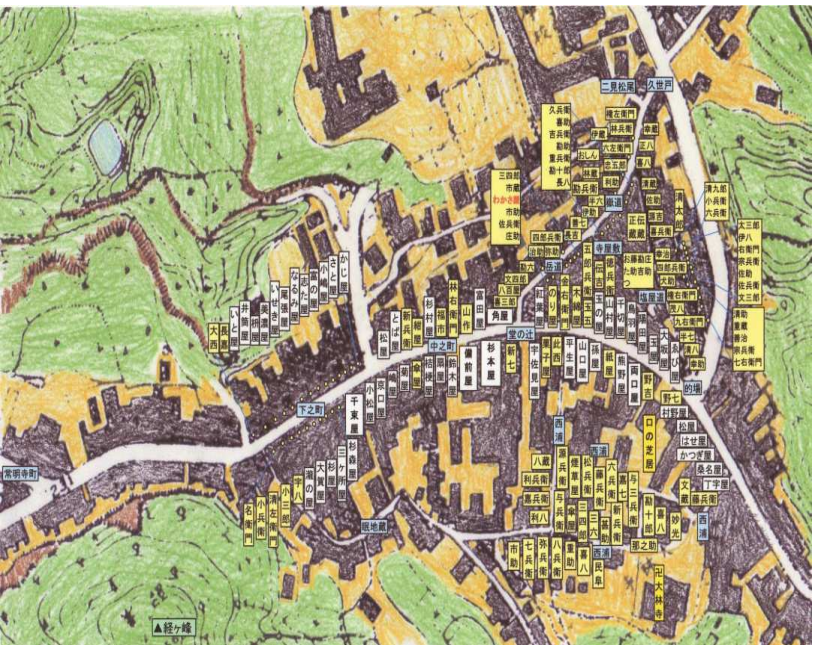
「せり上げ舞台」とは、案内されてきた客が、まず、踊りの間に通され、茶菓の接待を受けていると伊勢音頭が始まる。チョンと拍子木が鳴ると、キーという音と共に広い廊下に漆塗りの立派な手摺がせり上がつてき、朱塗りのぼんぼりと共に舞台が落ち着くと、舞台袖から20人くらいの遊女が揃いの衣装に身をかため、芸妓の囃子にのつて手振りよろしく踊りながら行き違うので、それを見て客は今夜の相手を決めるといふことになるが、杉本屋も含め、各楼ともその様式はほとんど変わらなかった。しかし、踊り子の立ち振る舞いには各楼でそれぞれが特徴をもつて顔見世は行われていた。備前屋では、踊り子が左右各10人ずつに分かれ、中央ですれ違つて左右に消えるのが特徴で、杉本屋の場

備前屋は「桜襖」であったので、それぞれ、菊寿楼、桜花楼とも呼ばれた。両屋は大正期まで昔ながらの伊勢音頭を見せていた。

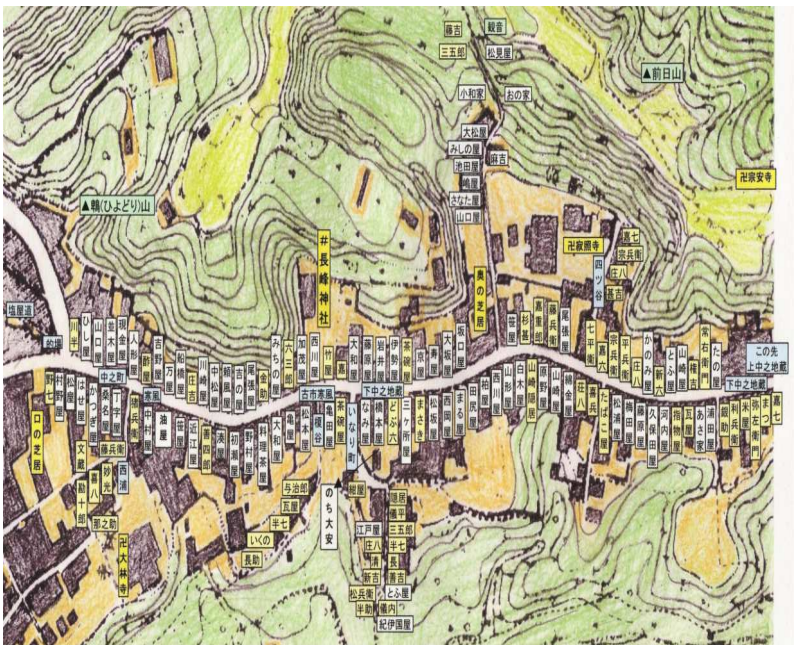
次頁の地図は、古市参宮街道てくてくまっぶ掲載の「江戸時代頃の古市参宮街道の街路図」を現在の街路図に配置し直して作成した地図を示す。それには以下のような記述があるので、1782天明2年に作成されたものとわかる。

北は尾部坂、南は(半)谷坂を限り、常明寺、上中之地蔵は略(常明寺遊廓と上中之地蔵にあつた遊廓は省略)。之其門徒、下中之地蔵町、古市、下之町迄、凡6丁街組名、5巷、9精舎(寺のこと)、大林寺、本誓寺、寂照寺など)之処、大芝居2ヶ所(口の芝居)後の長盛座と奥の芝居)。妓家70軒、街巷合(待合)而大数342軒。委記千茲「天明壬寅(天明2年)」軒氏考。

1782天明2年頃を現在の古市周辺に配置した地図



1782天明2年頃を中之町周辺に配置した地図



江戸末期

1796寛政8年、油屋騒動が起こるが、それを題材にした歌舞伎「伊勢音頭恋寝刃」が1829文政12年に古市で初演されている。1805文化2年には多くの参拝客の利便を憂いて千束屋里登が牛谷坂を改修している。一方で、妓楼千束屋が歌舞伎用品貸出業に転業して、遊里としての古市における一つの転換点が現れ始めている。

1837天保8年「古市細見花乃葉」に、4大妓楼と称された備前屋、杉本屋、柏屋、油屋の遊女数、子飼(遊女の使い走り)数、仲居(やりて)数が記録されているが、それらの規模の大きさが分かる。

- 備前屋 同58名、23名、7名、
- 杉本屋 同50名、23名、7名、
- 柏屋 同46名、13名、9名、
- 油屋 同31名、5名、0名、

その後、1851嘉永4年に、今もただ一軒残る「麻吉」(料亭)が創業している。1853嘉永6年、大林寺より出火し、多くが被害を受けたため、茶屋40軒、茶汲女780人に減少し、古市は衰退を見せ始めるが、まだまだ遊里繁盛というべき状態で明治維新を迎えることとなる。

1861文久元年 神風伊勢国当世高名三福対花方見立鏡」に記載されている古市の有名所は、名妓(名高い遊女のこと) 備前屋染吉・油屋千代、踊り 備前屋小三郎、妓楼 油屋清右衛門・杉本屋彦十郎・柏屋、料理 麻吉・丁亭、山田(との記載がある)有名所は、宿屋 藤屋利兵衛・半田屋竹之介、十文字屋五兵衛・桔梗屋 太郎兵衛、茶屋 松坂屋三右衛門、がある。

明治維新

1868明治維新直後、新政府の体裁も整っていないが、早くも神仏判然令が発布され廃仏毀釈運動に

よつて国中に大いなる混乱を招いた。伊勢でも、常明寺や蓮台寺など廃寺が相次ぎ、前述の如く、仏語町名が変更になったりしている。これに次いで明治政府の基本方針である「五箇条の御誓文」が發布され、江戸を東京と称し、天皇が即位して明治と改元し、明治新政府が樹立された。伊勢では山田奉行所と宇治と山田三方会合の自治組織が廃止され、奉行所に度会府が設置された。1869明治2年、伊勢神宮は第55回式年遷宮を迎えているが、江戸行幸の途中、明治天皇が天皇として初めて伊勢神宮を参拝した。これまでは天皇は伊勢神宮を参拝しないのが慣例であった。1870明治3年を迎え、天皇に神格を与え、神道を国教と定めて、日本を「祭政一致の国家」とする国家方針、つまり「大教」を宣布(大教宣布)することになるが、その施政として、1871明治4年、内宮神宮だった浦田長民などによつて神宮制度が大きく改革された。その内容は神職の世襲やこれまで伊勢参宮の先導役として大きな力を保持していた「御師」が廃止となり、彼らによる

全国各地の檀家への大麻配布が禁止されたことに伴ない参宮客が激減したことで、それで成り立っていた伊勢の町は、そして、栄華を誇った「遊里古市」の町は激動の時代を迎え、衰退が著しくなった。

新道遊郭の台頭

1872明治5年、公娼制度が確立された頃、多くの妓楼は、張見世様式(道路に面して格子構えで遊女が誘う様式)で誘客していたが、備前屋、杉本屋は伊勢音頭の舞台をやつていたため、そのような様式を採用してはなかった。

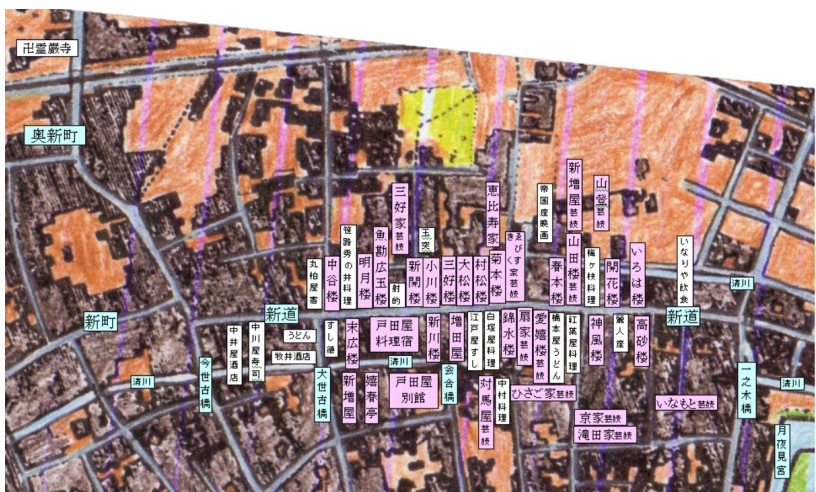
しかし、倭町(常明寺門前町 1869明治2年廃寺)や中之町(上中之地蔵)の遊郭がすでにその姿を消し、あるいは消しようとしている時、古市は妓楼(貸座敷)32軒、遊女(娼妓)640人に減少している。その原因は一つに明治維新による神宮参拝の変化が考えられるが、1716享保年間より形成されていた「新町しんまち 遊

郭」(大安寺門前町)や1828文政11年に開通して1830天保年間より発展し始めた「新道 しんまち 遊郭」(元靈厳寺門前町)の発展が大きいように思われる。新町遊郭は参宮の脇道筋にあたるので、1820年代文政の頃に盛んとなり妓楼数も27, 8軒を数えた。

1930昭和5年頃の 新町遊廓



1930昭和5年頃の 新道遊廓



また、新道遊郭は同年頃に松原清兵衛が河崎に至る道路を開拓したことで、靈巖寺の門前にあった茶屋を移転したのが始まりで、1847弘化4年には妓楼が16軒あった。



清川を挟んだ新道遊郭

それでもなお、昔から連綿と続いた古市大樓、例えば、杉木屋彦十郎、備前屋小三郎、油屋清栄門、両口屋勘兵衛、その他、数多くの老舗はみな健在で、どしどしと構えて古市を支えていたのであるから、まだまだかなりの勢いがあつたことを裏付けられる、という記述はあるけれど、この頃、備前屋を継承した直後の太田小三郎は、備前屋の内情は非常に窮していた、と伝えているので、どこの大樓も苦しい台所を抱え、虚勢を張って

いたようにも考えられる。

1882明治15年には古市妓楼28軒に減少し、1885明治18年、油屋・備前屋・杉木屋と4大妓楼に数えられる名門中の名門だった「柏屋」が廃業し、1887明治20年頃には、古市寒風付近(油屋付近)より南には妓楼は1軒もなしの状態になった。その翌年、3大妓楼の一つ「油屋」が旅館に転業した。明治末から大正初期には古市には旅館が14軒あつたといひ、妓楼から転業したのも多かつたであろう。油屋はその後、山田(現、伊勢市)駅前に支店も構え、昭和20年に戦災で焼失するまで繁栄している。

交通の発達

1889明治22年、東海道線(新橋〜神戸間)が全線開通し、1897明治30年には参宮鉄道の亀山〜山田(現、JR伊勢市駅)間が開通するに至つて東海道線と結合したことにより伊勢詣の利便性は飛躍的に向上

した。さらに、1903明治36年、路面電車の山田〜二見間が、翌年には外宮〜内宮間が開通したことにより、山田駅が新しく参宮の玄関口となると、年を追つて参宮客の乗降は激増し、駅前に大廈高樓の旅館が立ち並び、一大駅前旅館街が形成された。その駅前旅館

古市の備前屋主人の小三郎によつてなされたことは皮肉なことであつた。

世代交代

これまで述べてきたように、古市妓楼は江戸中期に絶頂期を迎えたのち直線的に減少してきた、つまり遊里古市が種々の理由ではあるけれど、自然の摂理に従い衰退してきたということであるが、大正初期前後に妓楼数減少の幅がやや持ち直している。この事象は古市妓楼の経営者の「世代交代」が大規模に行われた結果ではなかつたか、と考えられる。

景気というものは、良くなったり、悪くなったりを繰り返すが、その波に揺れ動くように妓楼の「世代交代」が行われる。まずは、明治以降の日本経済の混乱ぶりを確認してみる。

1868慶応4年〜明治2年まで幕府軍と新政府軍が戦つた戊辰戦争を経て、1874明治7年から不平士

族の反乱が各地で起こり、1877明治10年の西郷隆盛と明治政府が戦った西南戦争で国内の争いが終結した。この時期の経済は停滞していたと考えるが、軍需による特需も一部にはあったかも知れない。

続いて、国内の情勢も落ち着き、殖産興業の時代を迎える。明治5年以降、株式会社も設立されるようになり、1890明治23年まで(13年間)、国内産業は総じて発展したであろう。つまり景気は悪くなかったと思われる。

明治中期になると日本でも株式会社の数は飛躍的に増加した。その結果、1890明治23年に株式投機の破綻に端を発し、紡績業の過剰生産が重なって経済恐慌(銀行の金づまり)が発生して1893明治26年まで(3年間程度)経済は低迷した。

1893明治26年頃には回復し始めたが、その最中の1894明治27年、日清戦争が勃発し、勝利したことによって日本は戦時賠償を獲得し、その結果、消費が拡大して好景気となり、1900明治33年頃まで(7年

間程度)日本経済は大きく前進した。

しかし、その景気は長く続かず、反動不況に陥る。1900明治33年、北清事変が勃発し、わが国の対清輸出が大打撃を受け、株価は大暴落し、全国に取り付け騒ぎが広がった。伊勢でも他銀行と同様に、小三郎が創業した山田銀行も一時休業に至ったこともあった。さらに、1904明治37年、日露戦争が勃発して翌年に終戦を迎えるが、これら2つの戦争により対外債務が膨張して日本経済は崩壊の危機に瀕して、1900明治33年から1914大正4年(15年間)にかけて不景気になった。

1914大正3年から第一次世界大戦が勃発し、1918大正7年、日本が勝った形で終結した。その中の日本とドイツの戦争を日独戦役というが、大戦終結後の1915大正4年から1920大正8年(4年間)にかけて欧州商品のアジア市場不在の隙をつき、製鉄業や造船業、海運業を中心にアジア市場の独占によって日本経済は空前の好景気となり、「成金」などの流行語が

生まれ、大正バブル、成金景気と呼ばれた。

1914大正3年、第一次世界大戦が終結するやいなや、1918大正7年、日本はロシア革命に干渉するためシベリヤに出兵したが、国内外の非難により1922大正11年に撤兵することになる。その間、1919大正8年、輸入超過になり重化学工業は欧米からの輸入品との競争に苦しみ、1920大正9年、日本で株価や生糸、綿糸市場も大暴落し、慢性的な不況へと一変、企業の倒産が相次いだ。いわゆる戦後恐慌である。それに追い打ちをかけて1923大正12年、関東大震災が発生し、日本経済は大きな打撃を受け、企業の経営内容も悪化し銀行の倒産も相次いだ。このような暗い状況下、日本は昭和という新しい時代を迎える。

1926大正15昭和元年、経済立て直しのため金融引き締めが行われたが、1927昭和2年、(昭和)金融恐慌が発生し銀行の取り付け騒ぎもあって国内経済が困窮する中、1929昭和4年、アメリカの株価大暴落から世界恐慌が発生し、翌、1930昭和5年、日本経

済は危機的な状況に陥った。(11年間)

しかし、1931昭和6年に満州事変が勃発したことにより「満州事変景気」となり、世界恐慌脱出の有効な手段となつて1939昭和14年、第二次世界大戦が勃発するまで(8年間)継続した。

その後は、日本は満州事変からの紛争が進展し、1941昭和16年、太平洋戦争が開戦し、1945昭和20年に終戦を迎えるまで暗黒の時代が(6年間)続く。理解のため景気状況(継続年間)と古市妓楼数の変遷を簡略して示す。

明治05年 妓楼数 32軒

(不景気)明治10年までは内乱の時代

明治15年 妓楼数 28軒

(好景気)明治10～23年(13年間)殖産興業時代

(不景気)明治23～6年(3)経済恐慌

(好景気)明治26～33年(7)日清戦争賠償景気

明治27年 日清戦争

(不景気)明治33～大正4年(15)反動不況

明治37年 日露戦争

大正01年 妓楼数27軒

大正03年 第一次世界大戦

大正04年 妓楼数 22軒

(好景気)大正04～8年(4)大正バブル、成金景気

(不景気)大正08～昭和06年(12)世界恐慌

大正12年 関東大震災

(好景気)昭和06～14年(8)満州事変景気

昭和10年頃 妓楼数 9軒

(不景気)昭和14～20年(6)太平洋戦争

昭和14年頃以降、妓楼数 備前屋、杉本屋他

数軒か？

明治以来、戦争に次ぐ戦争の日本であった。景気の良い時がなかった訳ではないが、総じて不況に苦しむような状況などが古市遊里の衰退と世代交代の 一因となったと思われる。

このことについて、可通氏は、郷土史草13号や伊勢の古市あれこれP. 169に、第一次大戦による好景気

の反動で大正3年から5年に不景気となり、(古市の) 大家が相次いで没落した、と記載しているが年代に多少、錯誤があるように思う。

最初の不況の波は1890～93明治23～6年頃の初めて押し寄せた経済恐慌だったのではないだろうか？それも1894明治27年に勃発した日清戦争賠償景気で回復する。しかし、その反動もあり、さらに1904明治37年日露戦争が勃発して株価は大暴落、経済崩壊して、1900～15明治33～大正4年の15年間も続く反動不況となって古市は最大の苦境を迎えることとなる。しかし一転して、その後の1915大正4年から1920大正8年の4年間はバブル・成金景気となったということなので、不景気だったのは大正4年までで、大正5年からは好景気だったのでないだろうか。

年の錯誤には議論の余地はあるけれど、このような経済変動は結果として、富の偏在もこれまでとは大きく変化したに違いなく、これまで栄華を誇った大家が没落したり、機を見た成金が出現したであつたらう。

「遊里古市」の終焉

古市4大妓楼と言われた備前屋と杉本屋は、元々、主人の心情から廃業の時期を模索していたが、長く続く不景気にも耐えかねて潮時と判断したのである。両屋ともこの時期に経営者(世代)が交代したと考える。また、両口屋勘十郎など大家が相次いで没落したため、さらなる世代交代が行われた。この頃、1915大正4年の古市妓楼数は22軒と記録されていてあまり減少していないように見えるが、各楼の世代交代によって遊里古市は表面的に多少、永らえたと考えられる。

1925大正14年ラジオ放送始まり、一般市民の娯楽が変容し始めるが、その後も景気は変動している中で、1928昭和3年には古市妓楼数は21軒と言われそれほどの衰えは見えないけれど、困窮から人身売買する者もあり、社会問題となっている。相次ぐ混乱で古市の各楼は、廃業の時期を失って年ごとに増える赤字に目を瞑つて現状にしがみついていたのではなからうか、と可通氏は書いている。世代交代はしても備前屋・杉本屋は妓楼という形態を続けた。

1935昭和10年頃には、古市遊里は、可祝楼、角前楼、幾千代楼、古文字楼、千寿楼、備前屋、杉本屋、宮前楼の8軒ほどになつてしまった。1940昭和14年(15年とも)、杉本屋の下男の放火により杉本屋から失火し、西側の備前屋に類焼し、さらに西裏の2軒と風向きの加減で東側に延焼し、表通り3～4軒焼いて岳道に火の手が延び8軒くらいを焼いて鎮火しているが、この時、古市の灯は正に消えようとしていたが、杉本屋、備前屋の二大楼は間もなく立派に立ち直つたという。しかし、他はこれを機会に店を閉める家が續出して、事実上、2大楼は僅かに消えんとする古市の孤城を守つたに過ぎなかった。

そんな壊滅状態のまま、ずるずると1941～5昭和16～20年の太平洋戦争を経過し、終戦直前の1945昭和20年7月28～9日、8回目となつた大空襲によつて、山田地区と宇治館町など市内の約60%が焼

き尽くされた。古市では大林寺付近にあった油屋旅館など4〜5軒と下の町(現、テニスコート辺り)くらいが焼けた程度で、西裏、岳道、塩屋道は戦災を免れて、古市の殆どは無事だった、という一方で、どうしてその場所が狙われたかという点、古市の入口にある虎尾山には防衛隊が駐屯し、倉田山には内外宮の警護と志摩半島を防衛する護京部隊が、油屋にはその枝隊である郷土防衛部隊が常駐していたので、下の町や倉田山徴古館や油屋が爆撃されたのではないかと可通氏は推測されているように思われるが、当時の米軍の爆弾投下にそれほどの精度があつたのだろうか。

また、可通氏の別の著書、「一年生の思い出 古市の表支えた裏通り」郷土史草第13号昭和52年発行P.55によると、西裏は幸いにも岳道、塩屋道と同様に、殆ど戦災を受けていない。戦災を蒙つたのは、大林寺付近の4、5軒と下の町止まりで、他は殆ど無事であつた、などと書かれていて、全ての著書で、「遊里古市」に最後まで残っていた、「杉本屋」と「備前屋」がその

空襲で焼け落ちたのか、落ちなかつたのか、曖昧にしていくことが不思議ではある。

古市参宮資料館館長の世古氏は、古市の多くの地元古老に聞き取りをした結果、街道沿いの家屋は油屋から倭町の寿司屋角屋(戦災で焼失した長盛座横の両口屋が戦後、買収した)の少し手前まで全焼したというので、「杉本屋」と「備前屋」はその時、全焼したことが分かる。ただ、街道筋から少し離れただけで焼失を免れたので、「備前屋」の奥の方にあつた蔵は、2022年時点では現存して住宅に利用されていた。

このように、昭和20年7月の空襲は、宇治山田市(現、伊勢市)の大半を壊滅状態にし、既に死に体であつた「遊里古市」は完全に息の根を止められ、杉本屋と備前屋は2度と立ち上がることはなかつた。

戦後の古市は、当時の住宅不足を補うように多くの住宅が建てられるようになり、1951昭和26年には、杉本屋跡に市営住宅団地が建設された。この時が「遊里古市」の終焉である。

考察

遊里古市の衰退の原因を検討するために、次のグラフを描いてみた。

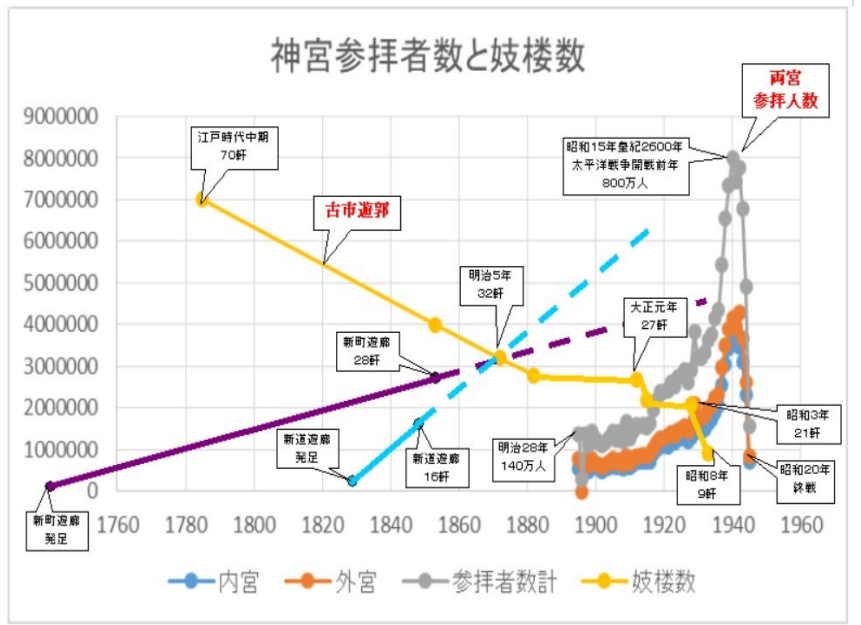
伊勢神宮の参拝者数は、太平洋戦争前夜の昭和15年皇紀2600年をピークに明治以降、指数関数的に単調増加傾向にある反面、古市の妓楼数は江戸中期の最盛期から単調減少しているので、伊勢神宮参拝者数が増加しても古市妓楼の衰退は食い止められなかつたと考えられる。

新町や新道の妓楼数はデータが余りに少ないので全く明確に論じられないが、敢えて言うならば、古市遊郭の衰退の原因は、参宮線の開通により宿泊施設が山田駅前大きく集結(今で言うアミューズメントパーク化)したことにより、駅に近く、平坦で往来が楽、という地の利を得て、新道、新町遊廓が古市に置き換わつたということではなからうか。勿論、外宮と内宮を接続する路面電車や御幸道路の開通などによる参拝経

路の変更が副次的に作用したと思われるが大きな要因ではなさそうである。

古市妓楼も大正初期に世代(経営者)交代が行われ、昭和初期にも回復を図つたように思われるが、その抵抗も虚しかった。グラフからは、分岐点と思われる1872明治5年は奇しくも太田小三郎が備前屋の主人となつた年であるが、何かの因縁だろうか。子供の頃の聞き伝えからもその他の資料からも、新町、特に新道遊郭の繁栄は昭和20年の終戦をまたぎ、昭和33年の売春防止法制定を超えてもなお繁栄したように感じている。



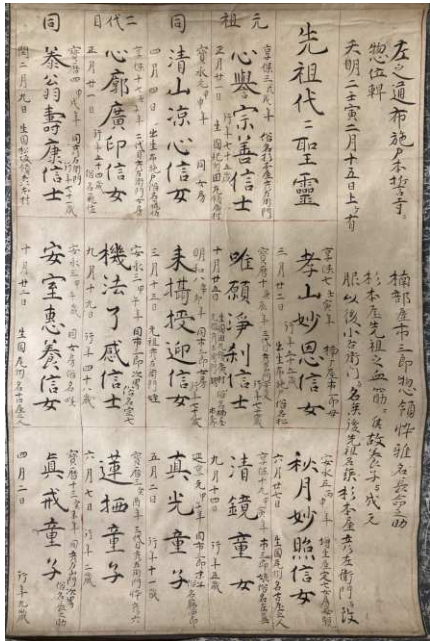


昭和8年頃の古市街道

二大妓楼の世代交代

二大妓楼の「備前屋」と「杉本屋」の成り立ちと世代(経営者)交代について少し詳しく言及するが、時代的な順序として杉本屋から始めたい。

杉本屋(菊寿楼、萃表楼)



江戸末期には4大遊廓の一つに数えられた杉本屋の繁栄ぶりを示す資料はあまり見つかっていないのでどのように大店に成長したかは分からないが、1661寛文初年に杉本屋は茶屋を始めたという記述が見つけられる。しかし、写真は古市参宮街道資料館所蔵の初期杉本屋(平生家)の聖霊名簿である。これによると、初代杉本屋彦左衛門は、1718享保3年に紀州藩田丸領広村に生まれて、行年75歳というから没年1793寛政5年頃ということになる。創業の頃は当然、成人になっていたと考えるので、生年から20年前後は経過した1741~3寛保年間前後に杉本屋は創業したのではないかと考えられるが、前述、1661寛文初年と80年の差がある。

創業後は勿論、すぐに大店になるようなことはなかっただろう。2代目は1754宝暦4年、紀州藩松坂領杰本村に生まれ、彦左衛門を襲名した。行年71歳とあるから、没年は1825文政8年である。3代目については全く分からないが、先代の歳から考えると1800

年前半に活躍したものと思われる。1837天保8年版「古市細見花乃葉」によると、杉本屋は備前屋と同程度の規模として記載されているので、この3代目彦左衛門が才覚を現し、杉本屋を大店にしたのではないかと、4代目は伊勢度会人物誌に記載がある平生栖鶴だと思われる。

平生栖鶴は、1839天保10年生まれで、飯南郡仁柿村の西井源七の長男、茂平で、何歳の時かは分からないけれど杉本屋の養嗣となつて平生彦十郎と称した号を栖鶴といい、為田只青の門に遊んで俳句を学び、画も能くした、という趣味人であつたと伝えられていて大店主人の風格を表しているので、3代目の時に杉本屋は大店になつた可能性があつたことを示しているように思われる。4代目の享年は1895明治28年、享年56歳だつた。

次の5代目、彦左衛門は神都名家集(1901明治34年発行)に詳しく書いてあるので要約すると、

2代目平生彦十郎(5代目彦左衛門)氏は、1866頃(前述通り、時代が合わないが?)、時勢に応じて茶屋を開き、屋号を杉本屋と称し、茶汲女を配して、旅人に煎茶を提供するのを生業としたが、歳月を経て現在(≡同書発行年1901明治34年の前)、杉本屋は、菊寿楼また萃^{すい}表楼とも称され、備前屋と共に全国屈指の古市遊廓の大楼として名声を馳せている。しかし、同氏は家業を継承した頃から妓楼家業からの転業を考えていたけれど、それに携わる人も多く、町への影響も大きいためにもできないと考えていた。そんな彼の純粋な気持ちを察して欲しい。

と記述されている。また、可通氏によると、杉本屋の廃業は1897明治30年(彦十郎31歳頃)、と記載されているけれど、別著では、1914大正3年頃から杉本屋は衰微して、かなりの借財があつた、との記述もあり、備前屋の世代交代資料からも明治30年廃業というのはいさし早いように思われるが、可通氏は続けて、(備前屋の)隣家の杉本屋も大扉を堅く下ろしたままであつた。その落魄の原因を知る由もないが、のちに借金

慶應2年7月29日、多気郡粥見村で水平多七の三男として生まれた。1875明治8年1月12日、10歳の時に平生家に養嗣に入り、1878明治11年2月20日養父彦十郎(4代目彦左衛門)が隠居したので、若干12歳の時、家督を継いで家政を執つた。性格はとても真面目で商売気がなく、家政は人任せだつた。また、細かい事には関知せず、慈善・公共心に溢れていたの、地方事業や弱者のために尽くした。そのため、表彰されたことは何度もあり、1895明治28年(先代没年時)、町会議員改選時に初当選して、1901明治34年に改選時にも当選している。

とある。昭和43年版伊勢市史によると、1904明治37年、町会最後の議員改選以降には彦十郎の名前ないけれど、1906明治39年第1回市議会議員選挙までは町会議員を勤めて政界を引退したと思われる。引退の理由も享年も不明である。

さらに杉本屋について次のように記述されている。

今を遡ること240年前、即ち、1661寛文初年のため家屋敷をとられたと噂されるほどの窮状であつたらしい。それはともかく、10〜15間という大きな間口の家が二軒までも大扉を下ろして休業しているの、古市には大きな鯨が二頭寝ている」と陰口を囁かれた。買収時には、古老が一人寝ているだけの寂しい境涯だつた。

と可通氏が書かれているので、明治30年頃に廃業をして10年以上、放置され、さらに借財がかさんだために遂に大正初期に売却する至つたのかも知れない。いずれかの時期に、古市下之町の妓楼「角長楼」の主人だつた岡本種松(以下、種松という)が6千円を出資して、平生彦十郎から杉本屋を買収し、その経営を娘婿の森 三六(以下、三六という)に経営を託したことよつて杉本屋の世代交代が行われた、という。

「角長楼」の主人種松の略歴に関しては全く手掛りはないので分かっていることから推測すると、後に、三六の妻となつた長女とら、通称、静枝(以下、静枝という)が1891明治24年に誕生していることから、種松

は1868明治元年前後の生まれではないかと思われる。その長女が誕生した頃、つまり明治20〜30年頃か、江戸時代から古市下之町(現、テニスコートの街道沿いの一角)にあつた貸座敷 佐渡屋重兵衛を買収して、「角長楼」と改称して妓楼を創業したのではないだろうか？この買収時期に関しては1871明治4年との記述もみられるけれど、年齢的に辻褃が合わないように思う。あるいは、種松の先代がその時期に買収していたのかも知れない。種松は商売上手だったのであろう、順調に蓄財し、その後、次々に古市の妓楼の買収を重ねることになる。



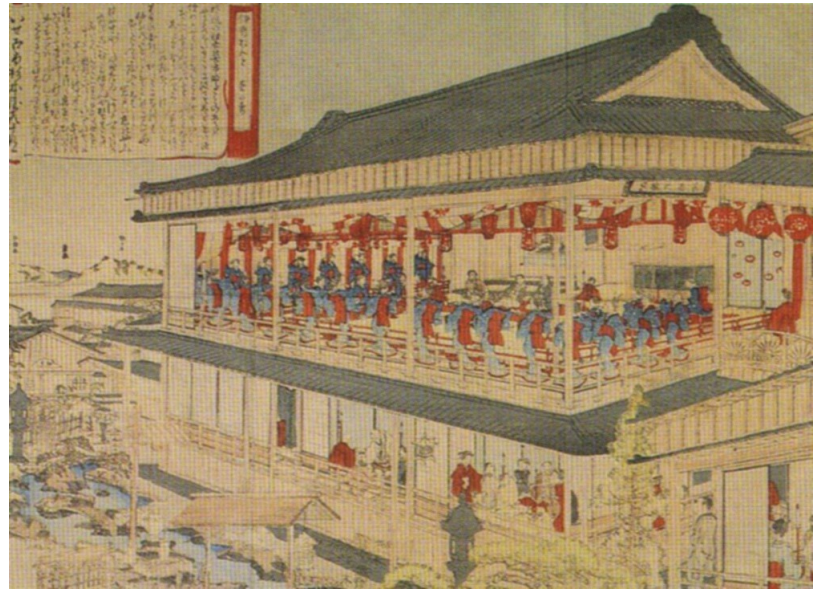
森 三六

一方、森 三六について、久世戸墓地にある墓誌には次のように書かれている。

森 三六の墓誌

畏友森三六君生於濱鄉村幼頓悟夙、
立志出山田刻苦精勵能成在、
日露戦役並西伯利亜出兵之際、
従軍依功叙勲六等賜功七級金鵝勲章
累選市會議員前後七回
又任消防組頭強化神都警防陣尋選為
宇治山田庶民信用組合長拮据□勉業績頭揚
晩年推為市會議長熱誠能□其職責不幸中道殘
易堪痛惜君資性豪□思慮周密頗重責任隨□
拳績就中所寄與市政不尠市民禾浴鴻澤遺德
昭昭千歲不朽茲錄其梗□以伝後昆云爾

伊勢音頭を踊る杉本屋



森 静枝の墓誌

先姚諱静枝字とら女
明治24年1月15日古市町岡本家長女生
大正2年4月30日森三六嫁
昭和6年3月31日病没享年40有2
同年4月2日於自宅以告別式葬森家之塋域



戸籍及び墓誌によると、三六は、1876明治9年8月1日に田尻村の農家、森家の次男として生まれる。田尻村は1889明治22年に、黒瀬村・神田久志本村・通村・一色村とが合併して浜郷村となった。1896明治29年19歳の時に歩兵第33連隊に入隊した。きつと優秀だったのだろう、翌年、選抜されて東京都新宿区戸山にあつた陸軍戸山学校(歩兵戦技を教え、陸軍軍人を育成した)に入学した。1904明治37年27歳の時に、日露戦争(翌年、終戦)に後備第3旅団に属し陸軍特務曹長として出征し、拔群の戦功を挙げ、勲七等を叙勲、功七級金鵄勲章を賜った。なお、三六が出征したのは、日独戦役(1914〜8年)と書かれていることがあるが、時期が合わず、墓誌にも記載されている通り、日露戦争(1904〜5年)以外にはない。そして、シベリアには家勢が落ち着いた1918大正7年に再出征している。

翌1905明治38年に、不景気風が吹き荒ぶ日本に帰国して、志をもつて山田古市の下之町にあつた「妓

楼 金波楼」の北隣りに住み始め、最初は高利貸の手伝いなどをしていたようだ。この頃から住まい近くの「角長楼」によく出入りして、その主人、種松と親交を温め、大変、気に入られたのであろう、種松が杉本屋を買収した時、番頭格として可愛がついた三六に経営を託したと考えられる。杉本屋を任された三六は卓越した商魂により、杉本屋の伝統を踏襲しながら繁盛させ、僅か1年で出資金6千円を完済したという。

種松は出資金の完済後、三六は(番頭なのだから)杉本屋を出資者(種松)に引渡すのが筋と考えていた。一方で、三六は、当所の出資金さえ返してしまえば、杉本屋は自分の力で大きくしたのであるから、おいそれと返す訳にもいかぬと主張して譲らない。とにかく話し合ひは難航して暗礁に乗り上げた、と言われているように、その後、続く軋轢の始まりとなる、と書かれているが、この軋轢の原因は果たして正しいのだろうか。

第一に、「備前屋」の項に記述するように、種松は、実子や娘婿に愛情を注いでそれぞれに妓楼を任せてい

ることを考えた場合、長女の婿である三六を「番頭なのだから」と区別するようには思えない。知り得た噂話を妄想すると、杉本屋の買収した時期には種松の長女静枝と結婚していなかった、と仮定すると種松が三六を番頭扱いしたことに合点がいく。従つて、杉本屋の買収時期は結婚の1913大正2年の前となり、1年で出資金を完済した事を考慮すると、杉本屋の買収は1912明治45年大正元年ではなかったか？

杉本屋を任された三六はその再生に奔走したであろう。噂話によると、その最中、三六は再婚だったようである。前妻との間に子供がいて、その育児に苦労していたという。それを見かねた「静枝」が三六に好意を寄せて、1913大正2年に、三六36歳、静枝22歳(年の差14歳)で再婚したのではないか。そうすると、娘婿となった三六は、杉本屋は当然、自分に帰属しても良いはずと考えたかも知れない、とすればこちらも辻褄が合う。反面、三六と静枝との結婚は年の差ゆえに父親の種松は、「可愛い娘を奪われた」感情を持ったに違いない。

「そんなにあの男が好きなら、親子の縁を切つてからにしろ！」と言ったかどうかは分からないが、この結婚は種松から祝福されないばかりか、さらに、杉本屋の帰属問題が絡み合つて、親子関係の離縁に発展するような両者の根深い軋轢が始つたように考えると自然な理解ができるように思われるが。

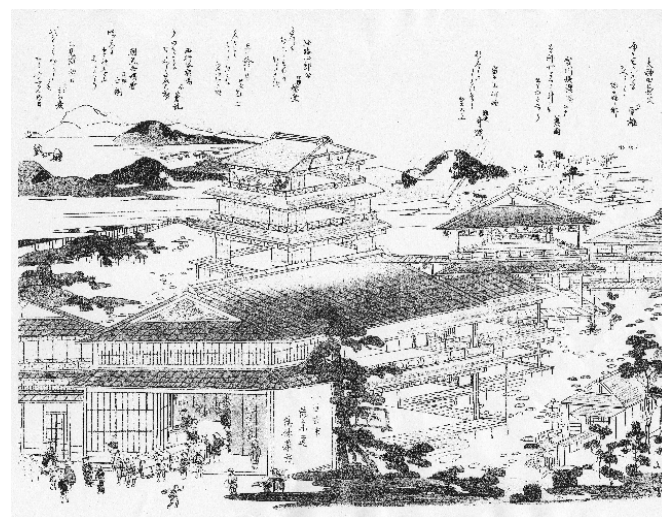
これらを時系列的に整理すると、杉本屋の廃業は1897明治30年頃〜明治末年であり、種松による杉本屋の買収は1912明治45年大正元年、三六・静枝との結婚と出資金完済が1913大正2年であり、その時から軋轢が始つたと言えるかも知れない。

また、買収金額に着目してみると、杉本屋が6千円だったのに対し、同格だと思われる備前屋は1万6千円であったことを考えると、杉本屋の買収時は反動不況の時期の明治33〜大正4年で、備前屋のそれは大正4〜8年の大正バブル、成金景気の時期ではなかったか、という推測が裏付けられるかも知れない。

このように折り重なった経緯があつたからこそ、その



杉本屋の伊勢音頭と中庭



杉本屋 菊寿楼の浮世絵

問題の解決は難しいと考えた種松は、三六への当て付けに金1万6千円で杉本屋の隣りにあつて売りに出されていたであろう備前屋を大正4〜7年頃、買収した。



杉本屋の中庭



大正から昭和初期の(三六)杉本屋



杉本屋建物配置仮定図
矢印は撮影方向



備前屋(牛車楼、桜花楼)



太田小三郎

0万程度の参詣者が伊勢に流入したという。そのように参宮が盛んに行われた中、1736元文元年、名古屋新地が停止され、各支楼は古市に帰らざるを得なかったが一層業務を拡張した。中でも、1748〜50寛延年間に備前屋は伊勢音頭を踊り始め、1794寛政6年、5代目が「せり上げ舞台」を作らせ評判を得て、古市4大妓楼の一つとして繁栄した。

前述のように、備前屋は江戸時代初期の1615〜23元和年間に創業したのかも知れない。それから約100年後の1716〜35享保年中に尾張藩主徳川宗直の施政により作られた名古屋新地に、中之地藏町遊郭の宇佐美屋や古市遊郭の中村屋、千歳屋などと共に出店していることから、その頃には既に大店となっていたと思われる。その頃、名古屋新地進出の時に高貴な人が牛車で来遊したことがあり、備前屋は、「牛車楼」と別称するようになった。江戸中期、参詣者数百万規模に及んだお蔭参りは例外としても、毎年およそ20万から4

そうして1868明治元年を迎える。この頃、備前屋の先代太田小三郎は1867慶応3年に没していて、その妻「まつ」が切り盛りをしていたが、苦しい経営をしていて負債は山積していたようである。その「まつ」に請われて、1872明治5年、九州英彦山生まれの鷹羽匡一が太田家養女「(西川)くに」と結婚し、(7代目か)太田小三郎(以下、小三郎という。)を襲名した。中央との結びつきがあった小三郎は、後の総理大臣、松方正義などの知遇を得て、1885明治18年前後には備前屋の家政を挽回している。

その後は伊勢ではよく知られているように、1886

明治19年に神苑会を組織して、神宮の整備や賓日館・徴古館などの附属施設を建設し、1895明治30年には参宮鉄道を亀山から山田駅まで延伸させている。また、1894明治27年、山田銀行を開業させ、1896明治29年、宮川電気を設立して市内への電力供給を行い、1903明治36年、路面電車の山田二見間を、翌年には外宮内宮間を開通させ、神都宇治山田(現、伊勢市)を総合的に整備した。正に、「近代伊勢を創った太田小三郎」と呼ぶにふさわしい活躍を見せた。

備前屋の家政を挽回した小三郎であったが、(前述、杉本屋の平生彦十郎と同様に、)早くから家業の廃業を考えており、これからの日本の動向に対する先見の明から養嗣光熙を電鉄畑に走らせ、自らもその時機を待つていて、1915大正4年、遂に備前屋を廃業したと可通氏は書いているが、杉本屋とともに廃業した時期に関しては明確ではない。

小三郎が心血を注いできた「神苑会」は1911明治44年、66歳の時に解散するに至り、その他の活動もそれに伴い、1918大正7年頃、遺族によつて、備前屋の売却処理が行われたと思われるが、備前屋の廃業、売却の時期に関しては今後も調査を継続したい。

その結果、備前屋は古市下の町の角長楼岡本種松(以下、種松という)に売却され、家財道具は売立会によつて処分して、嗣子光熙(のち京阪電鉄社長)の住む大阪へ惜しまれながら引き揚げた、と可通氏は書かれているけれど、その後を継承した光熙は、その頃、京阪電鉄常務取締役であったので大阪に居住していたと思われる。従つて、可通氏が言われるように一旦は家族共々、大阪に引き揚げたかも知れない。しかし、時代の要請に従い、光熙は早くも1918大正7年、小三郎が創業した伊勢電気鉄道(旧宮川電気)の社長に就任して、大阪の京阪電鉄と重席し、伊勢電鉄が三重合同電気、合同電気、東邦電力と変遷するにあたつても大阪と伊勢を行き来しているので、引き揚げたという表現は適切でないように感じる。

備前屋を継承した種松にとつては、その直後に第一

一区切りついて、1912明治45年大正元年を迎えたと考えられる。その時、前述したように、北清事変や日露戦争によつて日清戦争からの反動不況が明治33(大正4年)の15年間も続いた事により備前屋の台所は非常な窮地に陥つていて、小三郎はその生業を整理したいと強く考えたに違いない。小三郎のひ孫に当たる鷹羽氏によると、当時、小三郎は廃業に当たり備前屋に残された借財の処理に苦慮していたようだとも言われている。そして、小三郎の急逝に従つて、1918大正7年、その遺族によつて潔く廃業が宣せられた、との記述もあるが、廃業を宣したのは小三郎本人だと考えるのが自然な感じがする。そうすると、廃業宣言は1911明治44年から小三郎が死去する前の1916大正5年の間、つまり、可通氏の言われる1915大正4年であった可能性が大きいのではないか。

しかし、その処理最中の1916大正5年、小三郎は流行していたコレラに感染し、廃業の志、半ばにして敢えなく急逝したように考えられる。享年71歳だった。

次世界大戦が終戦し、大正4(大正)8年の4年間は大正パブル、成金景気といわれた良い時期を迎えたと思われる。

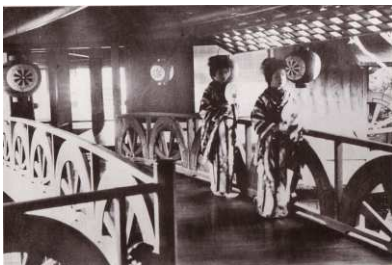
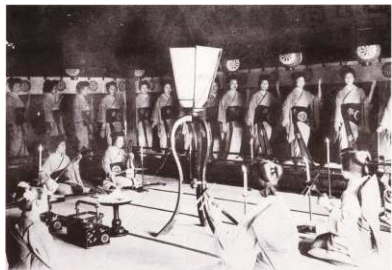
宮川電気のみ伊勢電鉄の路面電車



大正から昭和初期の(種松)備前屋



欄干に牛車の車輪があしらわれている



杉本屋と備前屋の軋轢と融和

三六は、自分のものとした杉本屋の経営を続けたが、墓誌にも略歴にも杉本屋を経営していたことに関して記載がないので、あまり誇らしいことではないと感じていたのかも知れない。杉本屋は専ら、妻静枝に任せっきりで公益に力を注いだ。

1906明治39年に町が宇治山田市になり市議会が開設されているが、三六は1916大正5年、第4回宇治山田市市議選挙に初当選①(非記念倶楽部派)し、その後、②第5回大正9年、③第6回大正13年、④第7回昭和3年、⑤第8回昭和7年、⑥第9回昭和11年、⑦第10回昭和15年の7回、連続して再選されている。1927昭和2年には市参事会員に選任されている。

その頃、宇治山田市政界は西田周吉(旅館宇仁館々主)派と浜田国松(元衆議院議長)派とに分かれて相争っていたが、古市町会でも西田周吉の大番頭を自認する三六の杉本屋派と浜田国松の懐刀、国府重周(種

現存していた備前屋の蔵



松の娘婿で大正13年と昭和4年に市参事会員に選任されている)を擁する備前屋派に分かれて相争い、それに種松と三六の杉本屋経営権争いが加わって、熾烈な泥試合が繰り返えされた。種松の長女静枝が難産で没した時(1931昭和6年、享年40歳)も父の種松に、杉本屋からは何も通知がないまま、葬儀にも列席出来なかつたというほどの深刻な不仲が続いていた。

一方、三六は、杉本屋を運営している最中、1918大正7年にシベリヤに出征し、翌年、凱旋して勲功により勲六等旭日章を叙勲しているが、同年、宇治山田市消防組(今の消防署)の活動にも熱心に取り組み、その部長となつて病弱な組頭を補佐し、長年、活躍して、遂に1934昭和9年、宇治山田市消防組組頭に就任して、県消防協会より功績顕著で表彰されている。1936昭和11年には宇治山田市消防組常備部を新設して宇治山田駅屋上に監視楼を設置して、市の消防活動に大いに貢献している。また、昭和9年には所得税調査委員にも当選していて、その活躍は多方面に亘っている。

1937〜8昭和12〜3年に第14代市議会議長となり、市政にて大いなる活躍をしている。1940昭和15年皇紀2600年に再び、第17代市議会議長に就任(2回目)し、1943昭和18年、宇治山田市と大湊町の合併式において議長として祝辞を述べているが、1944昭和19年、任期中に病没して北岡善之助に議長をバトンタッチした。享年67歳だった。

1940昭和15年の商業組合「一覧」には、宇治山田乗用自動車運輸商業組合 宮後町 森三六とあり、昭和人名辞典第3巻 1987昭和62年発行 高野義夫(底本「大衆人事録」第14版1943昭和18年帝国秘密探偵社)によると、蘇鉄味噌(株)代表でもあるので、三六は多角的に活躍していたと思われる。

一方、種松については前述通り、何も分かつてはいないが、その長男は種吉という。種吉は竹本文車と名乗る浄瑠璃の素人名人で若い衆芝居にも貢献した人である。終戦後の零落の身になってからも、きちんと羽織を着、白足袋をはき、杖をついて道を歩いていた。彼は生

涯、徹底して長袖を通した人で、自らの手で一銭の銭も貰ける味を知らずに逝った、と言われている。このような長男に種松は「備前屋」を与えた。

次男は己之助というが、その名前は資料によって異なる。

己イすでに 昭和6年宇治山田商工案内

己コキおれ 古市考P. 177

己シシ 昭和2年商工人名録

などが使われているのでどれが正解なのか判断できないが、ここでは、己之助いのすけに統一する。

己之助は古市の若い衆芝居の花形で声が大きいで特に有名であった。種松は、角長楼の筋向かいで清月楼の隣、間口の大きな「津乃国屋」を買収して次男己之助に与える。「津乃国屋」は、幕末まで妓楼をしていた三ヶ所屋と杉屋を合併して旅館としたものである。可通氏によると、それは備前屋の廃業後2年、即ち、1917大正6年であったと書いているが、商工案内や電話帳の記録から、1922大正11年までは津乃国屋は、

夏田だけ 電話番号838とあり、1925大正14年によくやく岡本己之助となり、それは1931昭和6年まで続いているが、それ以降はないことを考えると、津乃国屋の買収は、1922大正11年〜1925大正14年の間ではなかったか。

娘婿はもう一人いて、前述のように市会議員として、三六と政争した間柄の国府重周しげちかである。

旧日赤山田病院(現、テニスコート)に街道から入る道を「日赤みち」というが、そこから倭町までを「下之町」という。そこには角から倭町方向に、関東大震災前後は、角前楼、角長楼、長寿楼、丸本楼、成見屋の順で、昭和3年には、角前楼、宝生楼、長寿楼(国府)、丸本楼、成見屋、あるいは、同年頃を示すと思われる尾部坂付近略図には、国府自動車、長寿楼、丸本楼なるみや、紅葉軒、金波楼の順にはなっているけれど、下之町の角長楼周辺の変遷について可通氏は次のように書いている。種松が備前屋を譲り受けた大正7年頃、角長楼はもう一つ北隣に移っていたが、備前屋へ長子

種吉を連れて引越すにあたって、旧角長楼を長寿楼に貸し(角長楼と長寿楼の位置が入れ替わった?)、新しい方(≪長寿楼か?)を娘婿の国府重周に譲っている。国府は一時期、ここで国府自動車を経営した。(伊勢の古市あれこれP. 113)、「丸本楼は旧柳屋の跡を襲ったもので当主は杉本屋の舎弟(国府のことか?)である。」「伊勢古考P. 177)、との記述に関しては理解するのはさらに資料が必要だが、角長楼あるいは丸本楼を娘婿の国府に任せたことが分かる。

さらに、愛情を注いだ種吉や己之助が演じた長盛座は1927昭和2年の古市大火にて全焼したが、種松は支援を集め、1930昭和5年に旧日赤前に長盛座を再建している。しかし、そのことによって種松は苦境に立つほどになったというくらい愛情ぶりである。

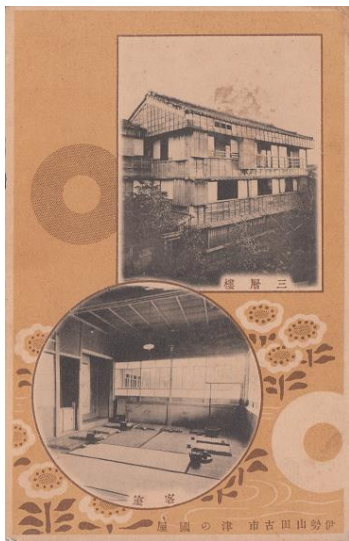


このように、種松が息子や娘婿に対し、いろいろな恩恵を与え愛情を注いでいることが分かる。愛情が深いがゆえに可愛い娘を三六に盗られたという憎しみが強かったのかも知れない。

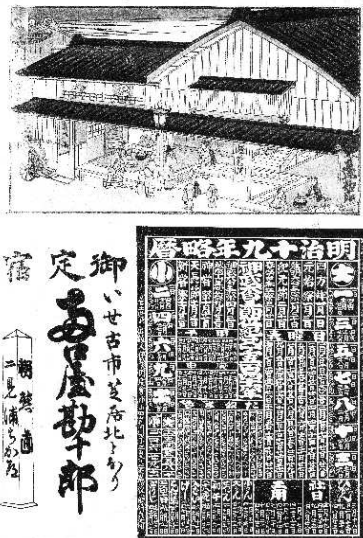
1939昭和14年(15年とも)、下男の放火により杉本屋から失火し、西側の備前屋とともに2軒と西裏の2軒が類焼し、さらに風向きの加減で東側に延焼し、表通り3〜4軒焼いて岳道に火の手が延び、8軒くらいを焼いて鎮火した。全焼にも関わらず、暫く後、杉本屋と備前屋は立派に立ち直ったという。その頃には輓があつた備前屋種松は高齢になっていたか、没していたか、あるいは2代目種吉に世代交代していたか、また杉本屋三六も62歳前後であり、3男2女の子供のうち、長男 淳男(25歳前後?)に杉本屋の経営を任せていたかも知れない。その時には両家の確執はなくなっていたのではないかと可通氏は結んでいる。

(完)

津乃国屋



両口屋



謝辞

同級生の森 裕司君から執筆のきっかけと資料を、郷土史研究家 飯田良樹氏、「いにしへの伊勢」の山田修司氏からは版面や絵葉書を提供いただき、古市参宮街道資料館々々長 世古富保氏からご指導いただきました。厚く御礼申し上げます。

古市参宮街道資料館



参考文献

- 伊勢古市考 昭和46年発行 野村可通
- 伊勢の古市あれこれ 昭和51年発行 野村可通
- 伊勢の古市夜話 昭和51年発行 野村可通
- 古市の表支えた裏通り 郷土史草第13号
- 昭和52年発行 野村可通
- 地方発達史と其の人物 昭和10年発行 鈴木善作
- 神都名家集 明治34年発行 三谷敏一
- 改訂 伊勢度会人物誌 昭和50年発行 川端義夫
- 宇治山田市史 昭和4年発行 宇治山田市役所
- 伊勢市史 昭和43年発行 伊勢市役所
- 伊勢市史 平成24年発行 伊勢市役所
- 伊勢を創った太田小三郎 令和元年発行 秋田耕司



年表

- 1631寛永08年 山田奉行の花房志摩守が遊女の追放を命じた
- 1633寛永10年 花房志摩守は闇妓楼13軒を所払いとした
- 1661〜80寛文〜延宝年間 茶屋と称して茶汲女を二人置くことが許された
- 1688〜1703 元禄年間 茶屋と称して遊女を置く大店も数軒できた
- この頃備前屋も創業か？
- 1704宝永年間初頭 古市は覺を連ね、軒を競う豪華な町並みが形成された
- 1718享保3年 初代杉本屋彦左衛門が紀州藩田丸領広村に生まれた 没年1793寛政5年頃、享年75歳
- 1716〜35享保年中 宇佐美屋(中之地藏町遊郭)、備前屋・中村屋・千歳屋(古市遊郭)などが第7代尾張藩主徳川宗直の施政により作られた名古屋新地に新店して利益を得た
- 備前屋の名古屋新地の出店に高貴な人が牛車で来遊したことがあり、「牛車楼」と称した
柏屋、杉本屋はこの時代は有名ではなかった。
- 新町遊廓が成立 1〜2軒茶店・茶汲女が許可された
- 1736元文01年 名古屋新地が停止、出店した妓楼は本店に帰り「層業務を拡張した
- 江戸時代中期 毎年およそ20万から40万程度の参詣者が伊勢に流入したという
- 1741〜3寛保年間前後 杉本屋創業か？1661〜80寛文〜延宝年間という説あるが？
- 1748〜50寛延年間 備前屋が伊勢音頭を踊り始める
- 1781〜8天明年間 古市全盛期に入る 人家342軒、妓楼70軒、大芝居2場、遊女約1,000人
- 1783天明03年 全国的飢饉で参宮客なし
- 1789寛政01年 第51回式年遷宮

- 1794寛政06年 古市大火で町の大半を焼失、遊郭改築の好機となり、大廈高樓を建て並べ、不夜城の盛況を成すようになった
- 1794寛政06年 備前屋5代目が「せり上げ舞台」を作らせる
- 1796寛政08年 油屋騒動起る
- 1805文化02年 千束屋里登が牛谷坂改修する
- 1808文化05年 妓楼千束屋が歌舞伎用品貸し出し業に転業
- 1827文化06年 第52回式年遷宮
- 1818文政01年 備前屋 戯作者 式亭三馬に依頼して宣伝の配り本「伊勢名物通神風」を刊行
- 1828文政11年 松原清兵衛が新道を開発して両側に2〜3軒の茶店を設けたのが新道遊郭の始まり
- 1829文政12年 第53回式年遷宮 古市で「伊勢音頭恋寝刃」(油屋騒動)が初演
- 1830天保01年 おかげまいり 年間400万人以上の集団参宮者があつた
- 1832天保03年 山田で打ち壊し発生
- 1836天保06〜7年 飢饉発生
- 1838天保09年 「伊勢音頭恋寝刃」浄瑠璃化され大阪で上演
- 1839天保10年 杉本屋平生彦十郎(4代彦左衛門)生まれる
- 1840天保11年 全国的飢饉により被害出る
- 1843天保14年 新道遊郭 遊女屋16軒が町宿に模様替えした
- 1847弘化04年 新道遊郭16軒に対し、売女に絹を着せて店頭に出してはならないとの条件で許可された
- 明治中期より漸次繁盛し、諸国参宮の客もここに集まるようになった
- 1849嘉永02年 第54回式年遷宮
- 1851嘉永04年 麻吉創業

1852 嘉永05年 新町遊廓は文銭を鑄造した時に創設したので文金廓とか、柳之世古にあったので柳廓とも言われた。主な顧客は、師職の家来や商人で古市の諸国道者を主とするのと趣きが違った。遊女屋の数は27〜8軒。明治までさしたる変化はなかった。

1853 嘉永06年 大林寺より出火、茶屋40軒、茶汲女780人に減少

古市の妓楼は衰退を見せ始めるが、まだまだ遊里繁盛というべき。

1854 安政01年 安政地震の津波で大きな被害を受ける

1862 文久02年 イギリス商船の矢湾に入津 鳥羽藩伊雑宮の防衛を命ぜられる

1864 元治01年 イギリス商船浜島港に入津

1865 慶応01年 イギリス軍艦浜島港に入津

1866 慶応02年 杉本屋(5代彦左衛門)の2代)平生彦十郎、多気郡粥見村 水平多七の三男として誕生

1875 明治08(9歳)平生家養嗣、1878 明治11(12歳)養父彦左衛門退隠により家督相続、没年不明

1867 慶応03年 大政奉還 三河で神宮の御札が降ったことからおかげまいり始まる 宇治御師職309軒

1868 明治01年 王政復古して明治政府樹立(明治維新)

山田奉行・宇治と山田三方会合廃止 奉行所に度会府設置(府知事 橋本実梁)

1869 明治02年 第55回式年遷宮 明治天皇神宮に初参拝 廃仏運動が起こる

1870 明治03年 祭政一致の大教宣布、廃仏毀釈運動が盛んになる 仏語町名を改称 古市では、(妙見町)

尾上町、(常明寺門前町)倭町、(下中之地藏町)中之町、(上中之地藏町)桜木町

1871 明治04年 御師制度廃止、祭政一致による神宮改革が行われる 郷社定則発布 御師制廃止

1872 明治05年 明治天皇行幸(2回目)二軒茶屋より上陸 のち記念碑建立

町屋宿(師職家と関係を持たない人達の宿泊施設)が自由に旅館業を営める旅籠屋規則が設けられる

公娼制度が確立される(娼妓解放通達時)、茶屋・茶汲み女を貸座敷・妓楼・娼妓と称した張見世様式(道路に面して格子構えで遊女が誘う様式)が多くなったが、備前屋・杉本屋は伊勢音頭の舞台をやつていたためその必要性がなかった

倭町や中之町の遊郭がすでにその姿を消し、古市の妓楼(貸座敷)32軒、遊女(娼妓)640人に減少

太田小三郎が備前屋を継承したが、内情は窮していたという

1877 明治10年 森二六が浜郷村の農家、森家の三男として生まれる

1889 明治22年 黒瀬村・神田久志本村・田尻村・通村・一色村を合併して浜郷村が発足 明治天皇伊勢神宮参拝(3回目)

1882 明治15年 古市妓楼28軒に減少、神宮消防組と一般地域のための消防組織が独立

1885 明治18年 四大妓楼(油屋・備前屋・杉本屋)の一つ、名門中の名門だった「柏屋」が廃業

頃、太田小三郎は備前屋の家政を挽回した

1886 明治19年 太田小三郎が敬神団体 神苑会を結成 コレラが大流行

1887 明治20年 頃 平野屋・泉屋(旧?)柏屋が合流して千歳屋として名古屋に進出

両宮神苑開設のため神城内に宇治橋内の中・下館の民家撤去

1888 明治21年 三大妓楼の一つ、「油屋」が旅館に転業 昭和20年に戦災で焼失するまで繁栄した

1889 明治22年 東海道線(新橋〜神戸間)全線開通、第56回式年遷宮 宇治と山田が合併して宇治山田町と

なる 古市長盛座新築 この頃、幕末まで妓楼をしていた三ヶ所屋と杉屋を合併して旅館「津乃国屋」が創業、麻吉と同様に芸妓を抱えていた

- 1890明治23年 太田小三郎 参宮鉄道(株)設立
- 1891明治24年 角長楼岡本家長女、岡本とら 通称、静枝生まれる
- 参宮鉄道 亀山 一身田開通 農業館外宮前に開館
- 1893明治26年 参宮鉄道 宮川まで延長
- 1894明治27年 日清戦争勃発(28年 宇治山田消防組ができた 山田銀行開業)
- 1895明治28年 杉本屋平生彦十郎(初代彦十郎、4代彦左衛門先代)没、
2代平生彦十郎(5代彦左衛門、29歳)第2回町会議員改選 初当選
- 京都電気鉄道開業
- 1896明治29年 森 二六(19歳)が歩兵第33連隊に入隊 太田小三郎・秋田喜助ら宮川電気(株)を設立
- 1897明治30年 森 二六(20歳)が選抜されて陸軍戸山学校に入学
- 参宮鉄道 宮川(山田間開通 宮川電気(株)電灯事業開始
- 1899明治32年 第6回全国五二大会開催 五二会ホテル開業 神都製紙創立 山田駅前参宮通り竣工
- 1900明治33年 娼妓取締令
- 1901明治34年 平生彦十郎(35歳)第2回町会議員改選当選(2回目)以後の当選はない
- 1903明治36年 路面電車本町二見間開通、神宮撤下御物拝観所建設
- 中之町伊勢屋の火事で大安・どぶ六・井村屋・武蔵屋ら20数軒が類焼
- 1904明治37年 日露戦争が勃発し、森 三六(7歳)が後備第3旅団に属し陸軍特務曹長として出征
- 路面電車外宮内宮間開通、
- 1905明治38年 日露戦争終戦 森 三六(8歳)が抜群の戦功を挙げ、勲七等(のちに勲六等)叙勲、功七級金鵄勲章を賜るこの頃、志をもつて山田古市下の町「金波楼」の北隣りに住まう
- 倉田山に神宮農業館新設
- 大正3年日清日露戦争により対外債務が膨張、経済体制が崩壊し不景気になる

- 1906明治39年 宇治山田町が宇治山田市になる(伊勢市になるのは昭和30年)
- 1907明治40年 「杉本屋」は明治40年(平生彦十郎41歳)に閉店した、とあるが?
- 1909明治42年 第57回式年遷宮 岡本種松は下の町旧日赤角で妓楼 「角長楼」を営んでいて、森 三六(32歳)はよく出入りして、「角長楼」主人岡本種松と親交を温める
- 1910明治43年 御幸道路開通
- 1911明治44年 参宮鉄道山田鳥羽間開通 神苑会解散
- 1913大正02年 角長楼主人岡本種松の長女(静枝22歳)と森 三六が結婚(14歳違い)、
長盛座焼ける、大正初期 古市妓楼27(30軒
- 1914大正03年 第一次世界大戦(1918大正7年)勃発
- 路面電車山田(内宮間開通、両口屋(勘十郎)廃業
- 頃から平生彦十郎杉本屋は衰微して、かなりの借財があり、廃業していたか
- 角長楼岡本種松が出資金6千円で 「杉本屋」を買収し、森 三六に経営を委ねた
- 頃、両口屋勘十郎など大家が相次いで没落 古市の世代交代進む
- 1915大正04年 大正天皇神宮(親拝 古市三大妓楼で最後まで残っていた備前屋が廃業。この時、古市妓楼は22軒 森 三六は卓越した商魂により、杉本屋の伝統を踏襲し繁盛させ、僅か1年で出資金6千円を完済。五二会ホテルは京都都ホテル山田支店となる
- 1916大正05年 備前屋太田小三郎死亡
- 森 三六は①第4回宇治山田市議選挙に初当選(非記念倶楽部派)、
以後、7回連続再選 ②5回大09、③6回大13、④7回昭03、⑤8回昭07、⑥9回昭11、⑦10回昭15 修交会を統率して市政に参画し市参事会員(昭02選任)であり、宇治山田市政界における戦前の大御所と言われるまでになったが、市長と市会との間に様々な対立が生じた

- 1917大正06年 頃、岡本種松が1万6千円借財を負って、太田備前屋を譲り受け、営業を開始
- 1918大正07年 森 三六、宇治山田市消防組(今の消防署?)部長となるが、シベリヤに出兵
- 1919大正08年 輸入超過になり重化学工業は欧米からの輸入品との競争に苦しむ
- 森 三六、シベリヤ凱旋勲功により勲六等旭日章叙勲
- 1920大正09年 日本で株価や生糸、綿糸市場も大暴落し、「戦後恐慌」により企業の倒産が相次ぐ
- 1923大正12年 関東大震災 日本経済は大きな打撃を受けた
- 1926大正13年 宇治山田市界は浜田国松(元衆議院議長)、国府重周の備前屋派と西田周吉(宇仁館主)、森 三六の杉本屋派に分かれて相争った。
- 1925大正14年 国府重周、市参事会員に選任(昭和4年にも)
- ラジオ放送始まる 「一般市民の娯楽が変容し始める。朝熊登山鉄道開通
- 頃、岡本種松次男巳之助が津乃国屋を経営 昭和6年まで
- 朝熊山登山鉄道開業
- 1926昭和01年 経済を立て直すために金融が引き締められる
- 1927昭和02年 「昭和)金融恐慌」が発生し、国内経済が困窮する 森 三六、市参事会員に選任
- 古市大火にて長盛座焼失 参宮急行電鉄設立
- 1928昭和03年 古市妓楼数21軒と言われた
- 岡本種松の娘婿国府重周が第7回市会で初当選 (以後、8回昭07、9回昭11)
- 市会では森 三六の対抗馬として活躍
- 1929昭和04年 経済の立て直しが図られたがアメリカの株価大暴落から「世界恐慌」が発生
- 日本の輸出が大幅に減少して昭和恐慌(不況)に陥った
- 困窮から人身売買する者もあり、社会問題となる
- 1930昭和05年 岡本備前屋他の支援にて長盛座が旧日赤前に再建 備前屋は苦境に立つ
- 伊勢電気鉄道 新松阪大神宮前開業
- 1931昭和06年 森 静枝、難産で死亡 40歳 結婚生活18年間
- 満州事変勃発 参宮急行電鉄大阪〜山田間電車開通 宇治山田駅を新築
- 1932昭和07年 森 三六、第8回市議定期改選により西田周吉、国府重周と共に議員当選
- 古市妓楼は、可祝楼、角前楼、幾千代楼、古文字楼、千寿楼、備前屋、杉本屋、松月楼、宮崎楼の9軒だった。
- 1934昭和09年 森 三六、宇治山田市消防組組頭に就任、県消防協会より功績顕著で表彰される
- 所得税調査委員に当選
- 1936昭和11年 森 三六、西田 一雄(西田周吉の長男)、国府重周とともに第9回市議に当選、
- 森 三六組頭らが「宇治山田市消防組常備部」を新設、宇治山田駅屋上が監視楼できる
- 伊勢電気鉄道は参宮急行電鉄(参急)と合併
- 1937昭和12年 森 三六、第14代市議会議長になる (昭和13年(1回目))
- 1938昭和13年 参宮急行電鉄大阪名古屋山田間電車開通
- 1939昭和14年 第二次世界大戦勃発
- 宇治山田市警防団 団長西田 一雄が組織されて、消防組は解散。
- 下男の放火により杉本屋から失火(昭15とも)し、西側の備前屋とともに31軒が類焼
- 種松の次男巳之助が角長楼筋向かいの「津乃国屋」を買って旅館を始める。
- 1940昭和15年 皇紀2600年 森 三六、第10回選挙(戦前最後)にて最後の市議に当選(第11回は昭和22年戦後)、第17代市議会議長に選出される(昭19(2回目))
- 同年版宇治山田市商業組合 一覧には、宇治山田乗用自動車運輸商業組合宮後町森三六
- 1941昭和16年 太平洋戦争開戦

1943昭和18年 宇治山田市大湊町合併式で森 三六宇治山田市会議長が祝辞
同年版帝国秘密探偵社によると、森 三六は蘇鉄味噌(株)代表とある。
1944昭和19年 森 三六病没 享年67歳 第17代市議会議長退職
1945昭和20年 7月29日大空襲で妓楼や旅館油屋が焼失して古市壊滅
1946昭和21年 終戦後、麻吉の前に1く2軒赤線が出来たがそれも消滅したという
1951昭和26年 杉本屋の跡地に市営住宅団地が建設された。

筆者紹介

昭和23年伊勢市大世古町に生まれ、昭和47年慶應義塾大学工学部電気工学科卒業後、日本ビクター株式会社に勤務し、レコード、ビデオディスク、DVD、記録ディスクなどの開発に携わり、退職後、技術コンサルタント会社を起業、現在に至る。実家の掛軸を受け継いだことから、その調査を経て、伊勢の近代史を研究するに至った。
著書、伊勢度会近世名軸図鑑、伊勢参宮近世名所図会、御師大研究などの自主製作本は三重県図書館や伊勢図書館に収蔵され、閲覧できる。

研究結果は、ホームページ <http://nfc.no.coocan.jp/index.htm> でも公開している。

2022年12月吉日 発行・印刷

著者兼発行者 秋田耕司

〒259-1206 神奈川県平塚市真田3・10・18
メールアドレス: koji.akita@nifty.com

印刷・製本 有限会社 N F C 技研